

金と友

不可能男

「もう限界、わかれましょう」

バタリと玄関の閉まる音が部屋に響いた、玄関が閉まる音というものはこんなにも切ないものだったであろうか。

「終わった」

尾田明正は失意のどん底にいた、入社して三年の小さなゲーム会社が倒産した。

小さな会社でもやりがいのある仕事ばかりだった、日曜出勤、サービス残業当たり前のブラックな企業だったが、自分のやりたい事ができたし、何より仕事が楽しかった。

その会社が倒産した。

無職になった明正は来る日も来る日も酒をのみつづけ、学生時代から支えてくれた美代子にあたってしまった。

なによりも大切であったその美代子が、明正のもとから去っていった。

これから先どうすれば良いのか見当もつかなかった、酷い倦怠感脱力感に襲われて座っている事すらままならなかったそんな時、空き缶や空き瓶でできたオブジェの置いてある机の上で、携帯電話が踊りだした。

僕、日向雄二には友人とが少ない、両手の指を合わせれば足りる人数である、その中でも尾田明正は特別な友人であった、中学2年生のころ父親の転勤で転校した学校に明正はいた、元々友達を作るのが苦手な僕に一年をかけて形成された小さなコミュニティの中に割って入ることは至難のわざであった。

そんな中、僕に声をかけてくれたのが明正だった・・・

その明正が失業したと耳にした僕はいてもたってもいられず、彼の電話をかけたのである。

携帯電話の画面には親友の名前が表示されていた。

「もしもし」

「もしもし、ひさしぶりだな、俺だ、雄二だ」

電話口から聞こえる声になぜかとても安心した。

「久しぶりだな雄二、元気か」

「お前こそ元気なのか、会社・・・倒産したんだって」

もう雄二の耳にも入っていたか

「ああ、それどころか今振られたよ、5年も付き合ったのに最後はあっけなかったよ」

雄二が電話の向こうで息をのむのがわかった

それは・・・と言葉に詰まっているようだ

「そんなに心配するな、なるようになるさ」

半ば自分に言い聞かせながら、精一杯の強がりを行ったのだが、言葉に力はこもらなかった。

しばらく無言が続き、やっとのことで雄二が口をひらきこういった
「お前にプレゼントがあるんだ」

電話ごしに明正の生気の無さを感じ取れた、電話を切った後の無機質な機械音がなぜだか心に染み渡った。

三日後雄二が家にやってきた、少し痩せてみたが健康なようだった、玄関口で軽く談笑した後部屋に招き入れた。

僕の家はそんなに広くないが、一人で住むのには十分だが、男二人だと少々狭く感じた。

「ところでプレゼントってなんだい」

雄二はあまり気になってないそぶりを見せながら催促した

「これだよ」

僕は茶色の封筒のなかから10枚の宝くじをとりだした

「プレゼントって宝くじかい、そんなものもらってもうれしくないわ」

と、悪態をつきながらも口元は笑っていた。

「俺、生まれてこの方宝くじ当たったことないんだぞ、300円もだぜ」

本当に信じられないといったような感じで雄二は大げさなりアクションをとった。

「昔っから運ないもんね」

「やかましい、お前もだろ」

ははっと男二人で顔を合わせて笑った。

「まあ今日はテレビで当選番号が発表されるからさ、この中から5枚やるから酒でも飲みながら見ようや」

「じゃあ右半分もらうぜ」

悪態をついてたわりにはノリノリだ、雄二が競馬や麻雀が好きなのは分かっていた、勿論宝くじも好きである、そういった賭け事が好きなのだが・・・昔からこれっぽちも勝てないのもしっていた。

ただ元気をだしてほしかったので、ひとまず成功といえるだろう。

「早くテレビつけなきゃ抽選会おわっちゃうぜ」

「そう急かすなよ」

雄二はいてもたってもいられないふうであった。

チャンネルを回すとすでに一等2億円の抽選が終了していた。

「えーっと・・・うわかすってもいない、まあ無理だよなあ雄二どうよ当たってたりするかい」
冗談交じりに聞いた

「・・・ってる」

「なんだって」

「当たってる・・・」

演技というにはあまりにも上手すぎる

「冗談やめろよ」

僕は雄二の手から落ちた宝くじの番号をみて愕然とした、その文字とテレビから流れるアナウンサーらしき人の読み上げる数字が完璧に一致していたのであった。